

で、方約四メートル、高さ約九〇センチの方形基壇上に据えられている。基壇は大小の割石状の礫の野面積みで、解体はゆるみを生じた基壇の周辺部に限られた。礫を除去したところ石塔の正面を中心とした表面に近いところから、現在通用の貨幣が現われ、更にその下部の表面より深さ一五〜四〇センチの間から、古銭二十四枚が検出された。かつて賽銭として奉納されたものであろう。銭銘は何れも寛永通宝で、(1)背に「文」の字のあるいわゆる文銭が六枚、(2)背の二箇所細い線をあらわしたものの一枚、(3)背に文字のないもの十七枚である。(2)及び(1)(3)について各一枚ずつ拓本を示す。

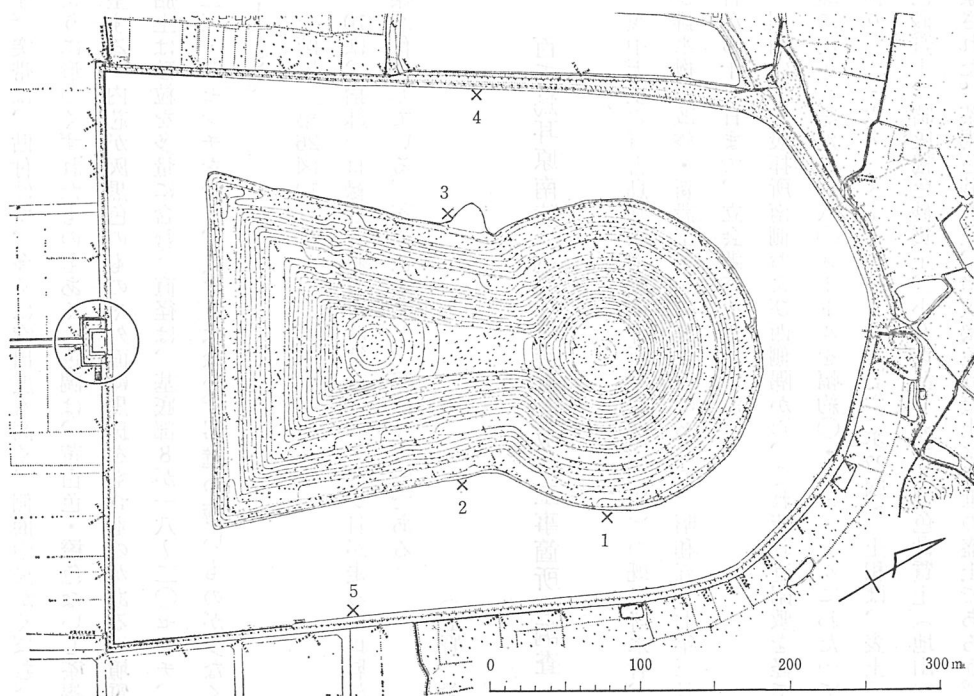
(戸原純一)

百舌鳥耳原南陵外堤護岸基礎補修工事の落水による

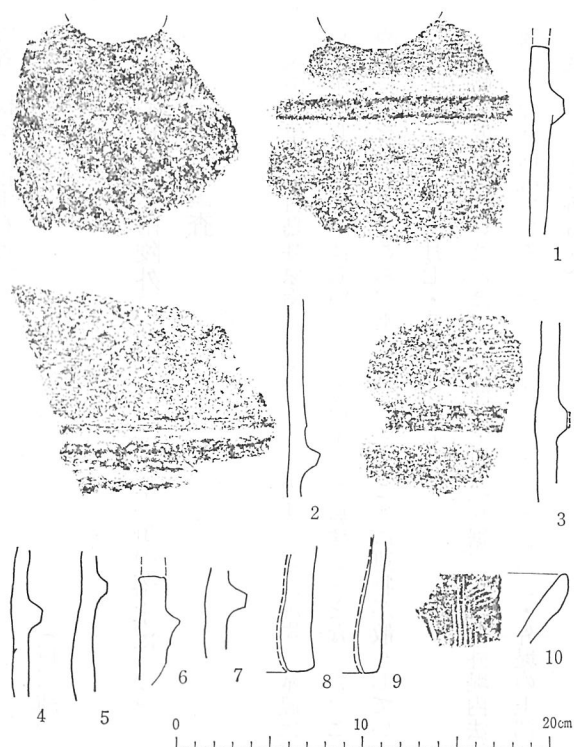
濠内表面調査

履中天皇の百舌鳥耳原南陵における外堤内法の既設護岸の基礎は、栗石が流出して傷みが甚しいので、復旧工事を施すこととなった。このために濠水を落したところ、水没していたところに遺物が散布していたので、昭和五十七年一月七・八日に採集した。

遺物が散布していたのは、第25図に示す墳丘裾三箇所と外堤内法裾二箇所、計五箇所である。遺物の多くは、それぞれ墳丘・外堤の上部から転落したものであろう。



第25図 百舌鳥耳原南陵採集・調査箇所的位置 (1/5000)



第26図 百舌鳥耳原南陵の採集品 (1/4)

採集された遺物は、計30片を数える。うち1片の土師器摺鉢を除くほか、すべて埴輪である。いずれも経年と水中にあったことで風化が著しい。

埴輪 (第26図1～9)

円筒ばかりで、形象埴輪は採集されなかった。成形は、粘土紐を積上げながら指でつまんでおさえ、なでつけたものである。内面に接合痕と斜方向のなでつけが認められるものがある。調整痕は、風化してほとんどとどめないが、1～3は、胴部外面に横方向の刷毛目を部分的に遺

す。突帯は、貼付けで、多くは突出度も高く、側面中央がくぼむ。6のように形のくずれたものもある。色調は、黄白色・橙色ないし茶褐色を呈する。内芯が灰黒色のものや外面に黒斑をもつものがある。埴質で、胎土は砂粒を多量に含む。直径は、基底部8が一八～二〇センチ、9が二三・四センチを計り、大きくはない。器壁の薄いものが少なくない(1～5)。

土師器 (第26図10)

10は、摺鉢の口縁部。斜および縦方向のオロシ目が走る。口唇部に、煤が付着している。茶褐色を呈し、堅緻な焼成である。

(笠野 毅)

百舌鳥耳原南陵一般拝所排水管改修工事箇所調査

履中天皇の百舌鳥耳原南陵の拝所(第25図○印)の既設排水管、および排水樹の改修・新設工事を実施するにあたり、昭和五十七年三月十一日から十八日まで、立会調査を行なった。

掘削は、一般拝所南側および西側隅から、それぞれ庭園敷を経て、外堤に向かう総延長約八〇メートルを幅約〇・五メートルにわたって、手掘りで〇・六～一メートル掘り下げた(第27図)。土相は、表土、茶褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、小石を混じえた茶褐色砂質土(地山)が観察された。茶褐色砂質土、暗灰褐色砂質土は後世の盛土であろう。地山